



長編 小説 『兼ちゃん』

東京女子高等師範學校教授 岡田みづ

(一〇) 新しい帽子。

「今日は、私行くまいとおもふ。」とお芳は言った。「千代坊がそれア氣むづかしいから。可哀さうだけれど肝油をのませなくちやなるまい。お前さん昨夜あんな鮭なんぞ食べさせなければよかつたのに。」

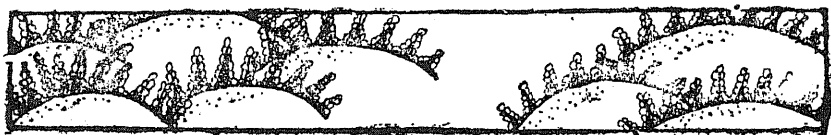
「ウーン。爪の大きな位のぢやないか。」

「それでも、あの子はまだ鮭を食べる程におほきくなつてゐないからね。」

私なら坊やにあんなものを食べさせはしない。お前さんだつてもうすこし考へて、欲しがるものを何でもやらないようにすればいゝに。今更仕様がなけれど。」

「ほんとにすまなかつたな。おら留守居をする。今日、別に行きたいとも思はないから。」
「そんな事はない。お前さん兼坊を連れて樂隊へ行つておいで。あの子に約束をおしなただから。」

「おまへ、あいつを連れてつてやれ。おら千代坊の世話するから。」



「馬鹿な！ 坊やが加減のわるいのは鮭のせいだときまつてる譯ぢやないんだから、そんなに氣を揉まなくつたつていゝよ。」

「鮭のせいぢやなからうか。」と吉藏は懸命に尋ねた。

「そうぢやないかも知れない。何しろ、私にやどうすれアいゝつてことが分つてゐるんだから、お前さん兼坊を連れて行つておいでよ……兼ちやん顔を洗つたかい。」

「うん。」

「ぢやブラシをもつておいで。髪をよくして上げるから……じつとして立つておいでなチヨツ！ この子は。そう頭を振り立てちやブラシがかゝらないぢやないか。……さ。よし。……手をお見せ。……これでお前洗つたの。」

「うん。」

「いつて、もう一度洗つておいで。そしてその紐をめて……私、一寸兼坊のこんたの帽子を出すから、千代坊を見てゐて下さい。」と言つて、お芳は押入へ首を突こんで箱を開けて、包みを取り出した。

「どんな帽子なんだ。」

「まあ、待つておいでよ。」と包み紙を解きながらお芳はにこゝした。店の人が之はアル



ブス帽でごく上品なんだって言つたよ。兼坊の帽子は新調しなくちやならなくなつてゐるだらう。今のは他出用のにはすこしみすばらしいから、あれを平日用のにして、これを他出用にしようとおもつて。そら！ 帽子つてこれさ。兼坊が「ヤア」ツていふだらう……坊や、来てごらん、お前の新しい帽子だよ。」

「子供のにしちや變な帽子だな。」と吉藏が批評した。大人のゝみたやうだ。全くだ、こいつは牧野のおやぢのによく似てらア……そらあの氣が狂つて新聞に何か書いて出した奴さマカルブ帽ツていふんだツて？ 兼坊、そのマカルブ帽を被つてごらん。」

言はれても、兼公は黙つてその帽子を熟視たぎりであたが、急に、

「あたゐ、そんなもの被らないや。」

「そらお前さん失策つたよ。」とお芳は鋭く小聲で夫をきめつけた。「お前さんが、つまらない事をいふから、この子がいやがるんだ……兼坊、お父ちゃんはね、冗談をいつたんだよ。こない、帽子、被つて、 樂隊へ行くんだらう。」

「いやだ。」と兼ちゃんの後すさりして「あたゐ、いつもの帽子がいい。」

「だつて、この方がどんなにいか知れない。……ねお父ちゃん。」と母親は吉藏に目顔で知らせて、答を促した。



「あゝ、いゝ帽子だな。」と彼は曖昧に答へた。たゞそれだけちや申譯がないと思つたか、兼公に「さあ、坊、母ちやんの言ふようにしな。」

「いやだ！」と兼公はたゞ魯鈍に言つたのみだつた。

「いやだ？かぶらないかい？」とお芳は怒鳴つて「被らなけア、被らせてやる！」と兼公の腕をつかまへて頭に帽子をキユツと被せてしまつた。こんな侮辱を受けて、兼公は泣きさうになつたが、涙を拂ひのけて、ふくれつ面をして親達の前に突立つてゐた。

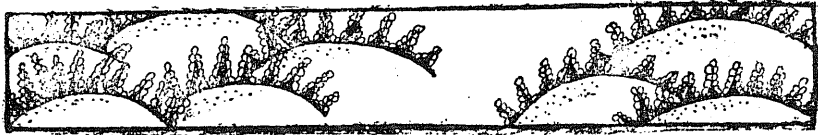
「お前こんなよい帽子を被つた事あるまい。」と母親は、得意満面で、眺めやつて「ね、お前さん。」と言つた。

「あゝ中々よい帽子だ。」と吉藏はねつから乗氣がしないで「だが、坊の頭に合ふのかな。」と訊ねた。

「合ふ？ 合ふどこちやない。坊の頭のために態々拵へたやうだ……お前かぶり工合がいゝだらう。」

「こいつ嫌ひだ、いつもの帽子がいゝや。」と子供は答へた。

「ちつきに馴れるよ。そんな上等のを被つてゐれば王様の前へ出たつて恥かしくない。……さ、お父ちやんと樂隊をきゝにいつておいで。そして、おとなしくするんだよ、お茶



の時にいゝもの上げるから。」

「さ、おいで」と父親は手を出した。「電車に乗つて行かうな。ひよつとすると、お父ちやんのかくしに何か入つてるものがあるかも知れないぜ。」

父子が出かけるのをお芳は愛想よく見送ると吉藏も見返つて笑顔をした。兼公は沈んだ様子をしてゐたが、その風變りの帽子には観念してしまつたらしかつた。電車に乗つてゐる間は二人ともいつもよりしんみりしてゐたが、樂隊が演奏をしてゐる公園へ着く頃には父親も悴の帽子をぬすみ視しなくなり子供も豆板に双の頬をふくらませて、平生の通りになつてゐた。

兼公は樂隊がドン／＼ブウ／＼陽氣にやる時は面白がつたが、指揮者が棒を緩く振つて樂器が休んだり靜かに微かになつたりすると、自烈つたがる風だつた。

喇叭が休んでゐた時、兼公は

「お父ちやん、あの人どうして喇叭を吹かないの。」と尋ねた。

「どうしてだかな。」

「あたい喇叭があれば吹くなア。一生懸命に吹くなア。」

吉藏が「さうだらうな。」と言ひかけると誰だか後ろの席で



「ちよいと、あれをごらんさい。なんてまあ馬鹿氣た帽子を子供に被せるンでせう。」
「ほんとにネ。私やうちの子にいくらお金をやるからッて言はれてもあんなものを被せて戸外へは出しませんよ。」

といふのが聞えた。吉藏は耳がほてるやうな氣がし、思はずパイプの先を噛み碎きさうになつた。

「坊や、あつちの方へまはつて太鼓打つ人を見てこよう。」と言つても

「いやだ、あたひ、あの人が喇叭を吹くとこ見るンだ。」と幸ひ今の言語をきかなかつたので兼公はそう答へた。

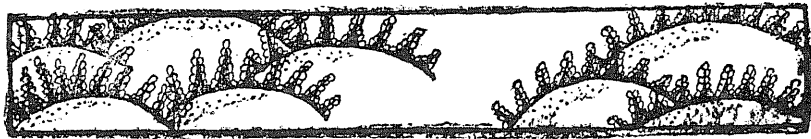
「世間には、上品ぶりがる人がありますね。」

「全くですよ。子供に人形見たやうな風をさせて嬉しがつてる親馬鹿はそれでよくても、子供が可哀さうですわネ。」

「坊や、」と吉藏は「お父ちゃんはその人が喇叭吹くまで待たないせ。あの人は招牌かんばんに持つてるだらう。お父ちゃんと一所においで。」

兼ちやんは不思議に思ひながら、父達に連れられていつた。

この時から吉藏はすっかり不愉快になつてしまつた。他の笑顔も、笑ひ聲も自分達が原



因になつてゐるやうな氣がしてならなかつた。樂隊の演奏が濟まないうちに二人は歸途に
ついた。……父親は子供が恥かしい思ひをしはせぬか〜と怖ち恐れてゐたが果してその
通りになつてしまつた。

電車の中で兼坊が元氣よく饒舌つてゐると酔拂ひが横目でじろじろ見ながらおめいの帽
子素的なの知つてゐるけい。」ツていつた。兼公は小さくなつて父にかぢりついて、それから
あとは黙りこんでしまつた。吉藏はお腹ん中が煮えくりかへりさうだつた。

往來を歩いて行くと向ふからやつて來た二人のちいさな男兒が兼公を見てにや〜笑つ
て、行き過ぎてからワツ！ て大聲を揚げて笑つた。吉藏は兼公の手を、も一層堅く握つ
たがそれでも黙つてゐた。

こんだは若い聲で後から

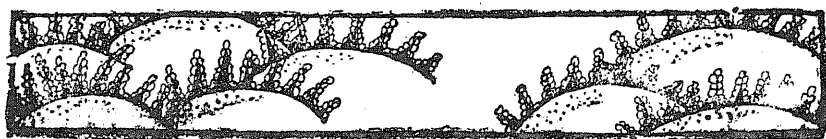
「その帽子は誰の形見だい？」とわめいた。もう一人が

「にせ坊つちやん〜」

「何ていつても氣にするんぢやないよ。」と吉藏は小聲に囁いた。

「あたゐ、……氣にしやしない。」と震へながら兼公は答へた。

三人小娘が通りすぎたと思ふと、揃つてくす〜笑ひをして、その中の一人が「お祖母



さん！」と一聲あびせて、三人共一塊りになつて走つていつた。

もう家に近くなつから苦惱も結了おしまだらうと思つたら、そうは行かなかつた。通りの角で金子の初ちやんだのその他兼ちやんの遊び友達が數名現はれた。此子達はわる氣はないのだが兼ちやんの姿を稍暫く見てゐてやがてクス／＼笑ひながら逃出してしまつた。するとよその家の二階の窓から「ヤイ、氣取つた帽子の奴！」と囃して「てめいの足を見せろい！」と無禮な忠告をしたものがあつた。

「いそいで二人が共同の入口を入るとワツといふ聲がしてその中でも「上品ぶツて」といふ聲が情なくもはつきりきこえた。階段を登り吉藏は額から流れるひや汗を拭き、兼公はたまりかねて泣き出しました。

「いゝさ、いゝさ。」と父親は兼公がしやくり上げる肩を撫で、「もうこんな帽子を被らせないからな、どんな事したつてかぶらせねい。」

二人は室に入つた。

「大層早かつたね。」とお芳はにこやかに迎へた。

「あゝ、早くかへつて來た。」といふ夫の聲はふだんと違つてゐた。

「アテ！ どうしたの？ お前はなせ泣くの、兼ちやん。」



誰も無言。兼公は帽子を床に投りつけて、

「こんなもの被るもんか！　こんなもの被るもんか！　あたい坊ちやんなかになるもんか！　坊ちやん何かになるもんか！」と泣きいて、胸も張り裂けさうに嗚咽なげびく家から駆け出てしまった。

「この帽子の畜生！」といつて吉藏は片足あげてそれを蹴とばし臺所の窓から戶外へとはね飛ばしてしまった。

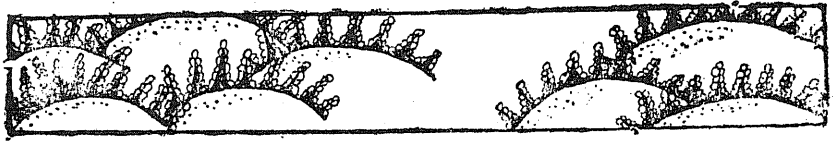
お芳はうろたへて夫を熟視みつきめるばかり、千代坊は泣くより他の術を知らないので聲を張りあげて泣きたてた。

「お前さん、氣が狂つたの。」とやつとお芳が呼吸せわしく訊いた、

「狂ひさうなんだ。おい、お芳、あの帽子はな往來に捨て、おくんだぞ。兼公には帽子の事は一口もいふんぢやないぞ。まあ、きいてくれ！」といつて一伍一什を話した。

「だつて、あれは立派な帽子で、上品だね、値段だつて……」とお芳はき、終らぬうに言ひ出した

「いくら金を出したつていゝや。おら、兼公にマカルバ帽とやら何とやらいふものを被せるくらゐなら一週間分の給料を損した方がいゝ。おめへ。まあ他にひといろんな悪口言はれて



もあいつが泣くまいと思つて我慢してゐる格好を見たら、……

「ちよいとお前さん、千代ちゃんを抱いて、おくれ。」とお芳は急にいひ出した。「あの子どうしたか見てくる。……泣くんぢやないよ、千代ちゃん。……お前さん何とかしてだましておやりよ。」

お芳は數分間去つてゐたが困つた顔をして戻つて來た。

「あの子は見えないよ。お前さん見て來ておくれ。あの子はあたしに隠れてるのかも知れない。」と歎息した。

「そんな事はない。泣いてるところを見られたくないんだ。だから、おれだつて、すぐさつき、追かけて行かなかつたんだ。さ、行つて、探して來よう。それからナ、……お芳、帽子の事はぶつとりとも言ふんぢやないよ。仕舞つて置きたければおら拾つて來るから。」
「何にも言はないよ。たゞい、帽子だし上品なのだから、もう誰か拾つてもつて行つたかも知れない。」

丁度その時兼公が入つて來た……すこし極りわるさうに、涙もよく拭かずに。しかし親達心配さうにしてゐるのを見て、待つてましたといふやうに、につこりした。

「お父ちゃん、あのネ……」



「母ちやんとこへおいで。」と父親がいふ。

「いやな子だね。」と抱きしめながら母親がいふ。

「お父ちやん、あのちいさな……」

「お茶の時に干ぶどうの入つたお菓子上げやうか。」と母親が訊いた。

「あゝ。」とにこ／＼して、それから、

「お父ちやん、ちいさな犬が戸外そとにゐるよ。そして、あたいの帽子に噛みついて、めちや

ぐにしてるよ！」（一〇）了り

餌を運ぶ親の羽音には

目をあかぬ子も口をあくなり

二宮尊徳

嘆かるゝ身よりも嘆く老の身を

嘆きこそすれ嘆かるゝ身は

高野長英